

(平成22年1月7日発行)

	<p style="text-align: center;">第16号</p> <p>北海道高等学校世界史研究会 事務局 北海道札幌西高等学校 ☎064-8624 札幌市中央区宮の森4条8丁目1番地 ☎(011)611-4401 / FAX(011)611-4403</p>
---	--

高世研第41回大会に向けて

北海道高等学校世界史研究会
会長 宮浦俊明
(北海道札幌旭丘高等学校長)

明けましておめでとうございます。2010年を迎えました。

まず、昨年の「高校生に教える『20世紀』とは？」をテーマにした高世研40周年記念大会に、100名を越す参加者を得て盛会裏に終了したことににつきまして、皆様に深く感謝申し上げます。大阪大学をはじめ法政大学、東京大学などの各先生方のご支援とご協力をいただき、また大学生や高校生も参加するという記念すべき研究大会となりました。ありがとうございました。

さて、世界が混沌とした様相を見せる中で、さまざまな情報が一瞬にして世界を駆け巡り、国境なき経済活動は国際化の真の意味を、我々に生活実感として理解させるまでに至りました。

今我々が教えている高校生には、やがて世界の若者と、交流というレベルではなく、共に生きるという生活感覚が要求されるでしょう。その時、中国の大学生は2000万人、日本の大学生は189万人といわれる環境の中で、日本の若者には何が求められるでしょうか。

それは、ヘレニズム的なコスモポリタニズムの持つ普遍性と個人の心の安寧という根源的な人間のあり方・生き方に及ぶのではないのでしょうか。具体的に言うならば、学ぶ意味・働く意味のグローバルな価値の共有と、己の拠りどころとしてのアイデンティティです。

私たちは、人を育てるという基本に立って、何を教えるかを世界史の教科指導の要にしたいものです。私たちは常に、知識が生きる力になるように、教育の基本を問いながら生徒に向き合いたいものです。

高世研のネットワークが、多くの地歴公民の先生方自身の生きる力を支え、温かく助け合う仲間たちが集う場になることを祈念し、挨拶とします。

第40回研究大会記録

<第40回大会記念シンポジウム>

－高校生に教える『20世紀』とは？－

日 時
会 場

平成21年8月7日(金)～8日(土)
北海道大学 文系共通講義棟(講義室8)
※札幌市・石狩市・小樽市巡検(8日)

開会挨拶
講演

森安 孝夫 氏 (大阪大学教授)
南塚 信吾 氏 (法政大学教授)
桃木 至朗 氏 (大阪大学教授)
古矢 旬 氏 (東京大学教授)
秋田 茂 氏 (大阪大学教授)
小川 正樹 氏 (函館ラ・サール高等学校)

報 告

パネルディスカッション
コメンテーター

鳥越 泰彦 氏 (麻布高等学校教諭)
三木 健詞 氏 (拓殖大学教授)

司 会
記 録

吉嶺 茂樹 氏 (北海道札幌北高等学校)
榊原 康文 氏 (北海道札幌星園高等学校)
佐野 祐子 氏 (北海道旭川東高等学校)
渡辺 大輔 氏 (北海道札幌白陵高等学校)
長峰 博之 氏 (北嶺高等学校)
及川 秀和 氏 (札幌山の手高等学校)



基調講演

「現代史の転換期としての1980年代

－1989年東欧革命を理解するために

法政大学教授（千葉大学名誉教授）

南塚 信吾 氏

20世紀の転換点となったのは、1989年の「東欧革命」であった。それをきっかけに、冷戦体制の崩壊、ソ連の解体につながった。この東欧革命を、同時代史的な国際関係及び相互関係に注目し、ネオ=リベラルと社会主義の闘争としてとらえてみたい。

1979年にアジアで中越戦争・イラン革命・ソ連のアフガン侵攻といった動きが始まり、これらがラテンアメリカでのアメリカによる「裏庭化」や湾岸問題とパレスティナ問題の連結といった「新冷戦」の動きを引き起こした。80年代の「新冷戦」の動きは、資本主義諸国での「ネオ=リベラリズム」とイスラーム世界での原理主義拡大をもたらした一方、この期間の社会主義の退廃は、ソ連のペレストロイカにつながった。ソ連の改革が東欧での市民革命を引き起こし、それがソ連社会主義体制の解体へはね返った。

80年代の歴史は、ナショナル=ヒストリーにとらわれず、同時代史的視点で理解しなければならない。

講演

「東南アジア史から20世紀を考える」

大阪大学教授

桃木 至朗 氏

東南アジアの20世紀を整理する柱として、(1) 植民地経済とアジア交易圏、(2) 上からの近代化とナショナリズム、(3) アジア太平洋戦争、(4) 東西冷戦とバンドン会議、ベトナム戦争、(5) 開発政治とASEAN、の5つが挙げられる。現在の東南アジア諸国（タイを除く）と旧宗主国との関係は、1対1の単純な関係ではとらえられず、それぞれ複雑・重層的な関係と同時に1つの交易圏として独自性を持っていることに着目する必要がある。

またベトナム戦争は、社会主義・国民国家が輝いていた時代の終焉であり、ポスト冷戦、民族問題といった現代の課題は、現代の東南アジア諸国・諸地域を見ていく上でも鍵となる。「貧しく遅れた東南アジアの人々を、先進国の自分が助けてやろう」とも、「先進国が失ってしまった古き良き社会がここにある」とも高校生が思わないような教育をお願いしたい。

講演

「アメリカ現代史から20世紀を考える」

東京大学教授

古矢 旬 氏

現代史におけるアメリカの意味を問う場合、「アメリカニズム」というとらえ方を
する。これは、アメリカ史に見られる特殊性と他地域にも当てはまる普遍性の両方
を持つものであり、例えば州権主義と連邦主義、孤立主義と国際主義といった相反する
双方を取り入れるアメリカの動きである。

アメリカ現代史は「長い20世紀」でもあり、この時代は3つに区分される。第1
期（1898～1932）は、大陸国家からフロンティアの消滅を経て海洋国家に変容した
時代、第2期（1933～1980）は、対外的には孤立主義から脱し、国内的には大きな
政府、もしくはケインズ主義の時代、そして第3期（1980～2008）は、唯一の超大
国となり、国内的にはレーガンからブッシュ(子)の4代の大統領によってネオ・リベ
ラリズム・グローバル化が推し進められた時代である。

講演

「グローバルヒストリーと高校世界史の20世紀」

大阪大学教授

秋田 茂 氏

アジアに基盤を置いた、アジア側からの世界史の見直しが行われている。その際、
「東アジアの奇跡」「東アジアのルネサンス」といわれる20世紀東アジアの経済発
展が、18世紀末のイギリス産業革命まで、アジアの経済発展はヨーロッパの経済発
展とさほど遜色なかったという、「長期の18世紀」と時代と重なる面がある。従来欧
米中心史観で語られてきた近現代史が、18世紀・20世紀の2つの方向から見直し
を行うことによって、結果的に19世紀のイギリスを中心とした世界システムの確立
をどのように見直すかが重要になってくる。

この現代史を考えていく上で、冷戦の構造とその崩壊及び地域主義の形成、脱植民
地化と開発主義（工業化）といった4つが重要となる。これらをつなげることによ
って、世界システムでアジアが果たした相対的自立性を解明できるのではないか。

報 告

「20世紀を高校生にどう教えるかー北海道華僑史から見えること」

函館ラ・サール高等学校教諭

小川 正樹 氏

現存している数少ない統計資料と、道内在住の老華僑聞き取り調査から北海道に華僑社会が拡大していく過程を検証する。北海道に定住した華僑の中心の1つは、福建省出身の華僑であり、福建省から函館、そして釧路までを1つの貿易ネットワークとして考えることができる。もう1つは山東省の商人のネットワークであり、山東省からウラジオストク、樺太、新潟、北海道を含む北東アジア貿易圏というものも同様に存在したと考えられる。北海道華僑社会の位置づけは、福建省と山東省、ウラジオストクから延びるネットワークが北海道と樺太でつながり、その人の流れがさらに千島列島へと向かったのではないか。

高校生に対して、父親・祖父の時代の歴史と現代史が重なってくるなかで、生徒に考えさせる格好の材料が増えてきているのに、なかなかそれを授業の中で教えられないジレンマが生じるが、こうした資料を通じて生徒に考えさせていくことが、世界史教育できわめて重要になると思われる。

パネルディスカッション

コメンテーター	麻布高等学校教諭	鳥越 泰彦 氏
	拓殖大学教授	三木 健詞 氏
司 会	北海道札幌北高等学校教諭	吉嶺 茂樹 氏
	北海道札幌星園高等学校	榊原 康文 氏

<コメンテーターより>

【鳥越氏】

1980年代がある区切りとして重要な一方、ネオリベリズムがもたらしている影響も非常に大きいのではないか。小さな政府がスローガンに掲げる「自己責任」「市場主義」「グローバル化」「効率性の追求」といったものは、ある意味でこれは1つの政治的スタンスに過ぎないのに、普遍的な価値観であるかのように迫ってきてあらがいがたい感覚もある。

また、効率性の追求は、我々身の回りの公共性を奪い、地域社会を壊してしまっているのではないか。また新自由主義とセットにして語られることも多い新保守主義といったものにつながっていることを感じる。そう考えると、1980年代を1つの区切りとして20世紀を考えていくことは、とても大切なことだと思う。

【三木氏】

秋田先生がおっしゃった「現代を長いパースペクティブで位置づける」こと、20世紀を20世紀だけでみるのではなく、20世紀がどのように過去から成り立ってきたかを見るという点から言えば、グローバルヒストリーは学校現場で教える上で、新しい視点だと思う。我々は世界史の教員だが、様々な言語に精通しているわけでもないし、研究者でもないのだから、資料を新しく自分で掘り起こすことは大変難しい。その資料を、歴史研究の先生方から新しい研究の成果として提供していただき、我々がそれを吸収して教材化していくこと、持ち帰って教育の現場でどう活かしていくかを考えたい。

このような研究会が、歴史研究者と歴史教育者との間で頻繁に開かれ、研鑽を積む機会として広がれば良いと思う。北海道の研究会はそのような意味でモデルとなる研究会だと思いながら拝聴していた。

<講師より>

【森安氏】

「歴史というのは面白いものだ」と体感しなければ、教師自身が面白がらなければ、他人に面白いと思わせることは不可能だと思う。私の経験から言うと、歴史の面白さは生資料にあるから、このような研究会を通じて、大学の研究職についている人間が提供できる生資料をどんどん高校の先生方に利用していただくことが非常に大事なことだろう。我々は現場の教師ではないが、そういうお手伝いをさせていただく立場なのだと思う。

【南塚氏】

世界史を考える際の問題は、世界史の大系や方法ではなく、むしろ考え方の問題だろう。つまり、ポストモダンの思想、歴史学方法論がからんだ国民国家論は新しい姿で登場してきていて、我々はいつの間にかそれにつかまってしまっている。そういうことを自覚しながら、なおかつそれを脱却する考え方をどう積み上げていくか、それ以外に世界史の道はないのではないかと思う。

【桃木氏】

森安教授は「世界史というのは近現代だけではだめだ」と言っており、私は「時間もないから近現代だけでもいいのではないか」と言っている。それについて、今日の古矢先生が、経済規模、エネルギー消費量等々の面において、人類の生活は近代以降爆発的にレベルが変わったが、それ以前は何万年も同じような状況にあったということをやや割り切って説明された。アメリカ人は、たぶん皆そのように思っているのだろうと感じた。

もしこのような考え方を極端にとらえて「だから前近代史なんて勉強しなくてよろしい」ということになるのであれば、はっきりと私は間違いだと申し上げたい。近代

以降、百が千になり、千が万になるようなものすごい歴史があったことは否定しない。ただし、それ以前にも、三が五になり、五が十になり、十が三十になり、三十が百になるという歴史があり、それは何万年もずっと同じだったわけではない。もし、何万年も同じなのであれば、中国の今日の環境破壊の問題など簡単に解決できるし、2000年前にすでに人口1億人の社会をつくっていることは軽視できないことだと思う。

【古矢氏】

産業革命くらいの時代から人間のセンチメントはずっとつながっていたものなのではないか、一定の期間の人間の価値観の中で揺り戻しや価値の複合などのような現象は色々起こってきたのではないだろうか。しかし学生は、世界史を古代から学び20世紀の入り口ぐらいで終わるケースが多い。少なくともフランス革命のような近代の入り口から現代までを一息で教えるというパースペクティブを持っていただきたい。そうすると、近代とそれ以前の関わりとか、何が古代から受け継がれてきたことなのか、何が中世世界と近代の境をつくっているのかが現代から見てわかりやすいのではないか。19世紀、20世紀、21世紀を一息で教えるつもりで現代史を考えた方が、結局は歴史全体に対する関心も広がるだろうし、学生自身の自発的な勉強を引き出せるのではないかと思う。

【小川氏】

高校教育の現場に立って生徒に伝えたいことは、我々の隣にいる人がどのような人なのかを知らなければ相互理解はできないこと。それは国籍、民族、肌の色、目の色、髪の色そして話す言語が違ってても変わるのではなく、変えてはいけないことなのだという事である。自分の隣にいる人がどういう背景にある人かを私たちは知らなければならぬ。それがまさに教育の本来の意味、世界史の本来の意味なのではないか。受験で何点とるかよりも、人としてどう生きていくべきかを伝えるために、地元の歴史を子どもたちに伝えていくことでローカルがグローバルにつながるその瞬間を生徒と共有するために、公務とは全く関係なく研究活動を行っている。

大学の先生がローカルを軽視しているわけではないと思うが、日本各地にはローカルがグローバルにつながる地域や研究が多々ある。それを有機的に結びつけて、それを知の財産として持続可能な社会にしていくことが大学の研究者の求められていることであると同時に、それを中学校・高校の教育現場で活かしていくことが次の我々の使命だと考える。

<大阪大学歴史教育研究会代表 堤一昭氏（大阪大学准教授）より>

【堤氏】

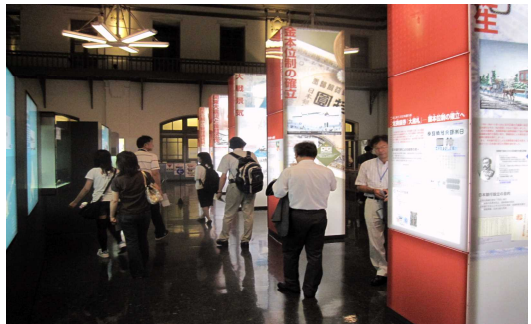
大阪大学歴史教育研究会は、模擬授業という形で、最新の研究成果を歴史教育につなげる活動、教材・教授資料の研究開発・試行、その他、今回の研究会のような高大連携、アジア世界史学会といった活動に取り組んでいる。このような活動は、高校の

先生方との連携・協力が絶対に必要である。

個人的に「高校生に教える20世紀」というテーマから、自分自身が中国史、とくに13世紀から14世紀のモンゴルの時代を専門にしている関係上、「20世紀の中国をどう語るか」を考えた。中国や台湾の研究者と語るとき、20世紀の中国を振り返る際のスタンスの差を感じざるを得ない。この差異の背景には、それぞれの人間がいる国の存在を考える必要がある。差異があることを認めつつ、その中でどうにじり寄れば差異を縮めていけるのか、教える20世紀をどう構想していくのかはなかなか難問であると感じている。

大会2日目（8月8日）

巡検



コース

★北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）前 8:30集合

館内見学 → 石狩へ → 石狩市本町地区（砂丘の丘博物館）

→（銭函・張碓旧市街）→ 小樽市総合博物館見学

→ 祝津港より観光船乗船 → 小樽港

→ 金融資料館（日本銀行旧小樽支店）見学

→（昼食）→ 小樽商科大学図書館見学 → 札幌へ

★札幌駅にて17:00解散



第40回大会を終えて

北海道高等学校世界史研究会事務局長
今井 一吉（北海道札幌西高等学校）

2009年8月7・8日の2日間、北海道高等学校世界史研究会第40回記念大会を無事に開催することが出来ました。まず初めに、今大会を共催していただいた大阪大学歴史教育研究会ならびに世界史研究所、また会場を貸していただいた北海道大学の関係各位に深く感謝いたします。また暑い中を参加いただいた道内・道外の先生方、OBの方々、出版関係の方々、そして今回のテーマに興味を持ち、貴重な夏休みの1日を割いて参加してくれた高校生・大学生の皆さんにも厚く御礼申し上げます。おかげさまで2日間のべ約150名（1日目116名・2日目35名）という多くの参加をいただき、盛況のうちに終えることが出来ました。

「民族」を切り口としたシンポジウムであった第30回大会のあと、第40回記念大会をどのようなものにするのかが事務局に課せられた課題でした。次のテーマを考えたとき、事務局の結論は「20世紀をどう見るか」というものでした。しかしこの結論に達したのと前後して、2006年秋、高校現場にはいわゆる「未履修」の問題がわき起こりました。その問題の渦中にあったのが「世界史」だったことは、皆さんの中でもそう古い記憶ではないと思います。あの時、新聞やテレビで流れた「世界史は受験科目として敬遠される」「分量が多く高校生にとって負担だ」といった学校現場からのコメントが、まるで「敗者のコメント」のように感じられたのは、私だけでしょうか。

この問題を受け、翌年（2007年）の第38回大会では「わたしたちは歴史（世界史）をいかに語るべきか」をテーマとし、ミニシンポジウムを入れた構成としました。そして40回大会を、「高校生に教える20世紀とは？」をテーマに行なうことで動き出したのです。ここに至るまでの取り組み、および40回大会の準備に関しては、吉嶺前事務局長のご苦勞と幅広いネットワークによるものが大きく発揮されたことを申し添えます。

さて昨夏の大会に話を戻しますが、当日はこれでもかというほどの内容を詰め込んだため、予定時間を大きくオーバーし、十分なディスカッションができないという不手際があったことを深くお詫びいたします。大会の内容については、今会報に各講演の要旨を掲載しました。また今年度中に集録を作成する予定ですので、そちらをご覧くださいと思います。


本研究会は、先進の専門的研究と授業実践の紹介や研鑽を主な活動としていますが、世界史を学ぶ高校生のための教材開発もさらに充実させたいと考えています。これからも多くの方々のご協力のもと、10年後の第50回大会がさらに盛況になることを祈念いたします。まずは今年の夏、第41回大会でお会いしましょう。多くの方々のご参加をお待ちしています。

▼今夏の第41回大会予定

日 時	平成22年8月6日(金)
会 場	北海道大学 共通講義棟
講 師	未 定
研究発表	未 定

●大会の詳細につきましては、後日改めて事務局から各学校にお知らせする予定です。

@世界史研究会のホームページ@

→  北海道**高**等学校**世**界史**研**究会

<http://www.augustus.to/~sekaishi/index.html>

■編集後記■

会報第16号の発行となりました。日頃からの会員の皆様のご協力・ご支援に、感謝申し上げます。第40回記念大会の記録を担当していただいた先生方には、お忙しい中にも関わらず原稿を作成していただき、本当にありがとうございました。

#

個人的なことです。ここ数年夏の高世研を欠席しておりました。昨夏は40周年ということで、勉強というよりはお手伝いをと思い、久しぶりに参加しました。当日は100名を超える方々が集まり、皆さんの熱気というかパワーに圧倒されっ放しの1日でした。また、先輩の先生方の懐かしい顔を拝見しつつ、若い先生方の意欲的な姿も目にする中で、高世研の40年のあゆみの重さや、受け継がれてゆくべきものの大切さを考えさせられた良い機会となりました。

#

最後に、編集上の不備な点等、関係の先生方にはいつもながらご迷惑をおかけしましたこと、お詫びして編集後記と致します。

(札幌南陵・吉田 徹)

